The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ピエール・ブルデューの『世界の悲惨（La misère du monde）』と教育学研究におけるその重要性
Author(s)	ヴィガー，ローター
Citation	大阪大学教育学年報. 2018, 23, p. 137-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67867
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ピエール・ブルデューの『世界の悲惨（La misère du monde）』と教育学研究におけるその重要性[1]

ローター・ヴィガー

（翻訳　上林　梓　小川竜冴　近藤凛太朗　林　宮玉）[(1)]

【要旨】

本論は、2016年11月9日に大阪大学・人間科学研究科において行われたL.ヴィガー氏（ドルトムント工科大学・教授）の講演を翻訳したものである。講演のなかでは、ドイツの教育学におけるP.ブルデューの『世界の悲惨』(1993) の位置づけと意義が中心に論じられた。1997年に出版された『世界の悲惨』ドイツ語版は、その政治的な影響力だけがクローズアップされ、学術的には正当な評価がなされてこなかった。しかしながら、ドイツの教育学におけるその重要性は、次の五つの根拠によって示された。すなわち(1)単一の理論的な立場への偏りを回避する(2)理論形成と合理的で経験科学的な方法とを兼ね備える(3)公的な政治的介入のみならず学術的な目的の措定をも含む(4)標準化された経験科学的な研究に対して批判的な立場をとる(5)インタビュアーとインタビュイーが共通してもつ条件を省察する。本論の最終節では、ドイツにおける教育実践や教育学研究、そのなかでも特に、人間形成諸理論とかかわるビオグラフィ研究の領域における、『世界の悲惨』の重要性を示す根拠が示され、さらには、その理論と方法の応用可能性が検討されている。

はじめに

本論は、以下の三節から構成されている。

第一節：ブルデュー理論における『世界の悲惨』の位置
第二節：教育学研究において『世界の悲惨』が重要であるのはなぜか
第三節：ブルデューの理論と方法をいかに応用しうるか

本論は、教育実践や教育学研究、そのなかでも特に、人間形成（Bildung[(2)]）諸理論とかかわるビオグラフィ研究[(3)]におけるピエール・ブルデュー［の位置づけと意義］に関するドイツにおける議論を背景とするものである。

1. ブルデュー理論における『世界の悲惨』の位置

ドイツにおけるブルデューの受容は、3つの段階に分けることができる。第一段階は、1970年代、ドイツの教育制度改革[(4)]の時期である。この時期、教育社会学の領域では、社会構造と社会的不平等を再生産する、教育の無意図的で隠れたメカニズムに関する調査研究が行われていた。教育制度が人々に均等な機会を提供しているという幻想に対するブルデューとパスロンの批判は、こうした教育社会学の研究群に多大なる影響

を与えた。ドイツでは、1964年から1970年にかけて執筆された様々なテクストを所収した論集『機会均等の幻想（*Die illusion der chancengleichheit*）』（Bourdieu & Passron 1971）が、ブルデュー理論の知名度を高めるのに中心的な役割を果たした。

第二段階は、『ディスタンクシオン――社会的判断力批判（*La distinction : critique sociale du jugement*）』（1979）のドイツ語版（1982）の刊行に始まる。本書においてブルデューは、フランスの戦後社会とその階層的社会構造、そして階級によって分化した嗜好（taste）や選好（preference）や日常生活の実践（practice）とを分析の俎上にのせた。本書は、ドイツ国内のみならず世界中で社会学のもっとも重要な著作物のひとつとなった。現在、［人々の］ライフスタイルは、これまでに数多くの調査の対象となるだけでなく、「ミリュー（milieu）」[(5)]と並んで、階級という概念に代わる社会理論上の基礎的な術語にもなっている。

第三段階は、1990年代、ブルデューがいわゆる政治的転回を遂げたとされる時期にあたる。彼はそれ以前にも知識人としての自己像を保ちながら政治的参加行動（アンガージュマン）（engagement）を行っていたが、それにもかかわらず、新自由主義批判の立場を公的な場で表明する姿勢を強めると、それまでとは異なる役割を担うようになったと捉えられた。時期を同じくして、1997年に『世界の悲惨（*La misère du monde*）』（1993）、1998年に『対抗火（*Contre-feux*）』（1998）のドイツ語版が出版され、新自由主義的な政策・イデオロギーへの介入的姿勢が明確化された。とくに『対抗火』は政治的介入としての色彩が強く、そこに収められたテクストのなかには、対決姿勢を前面に押し出したものも見受けられる。これに対して、『世界の悲惨』の方は、政治的な意図と理論的な意図の双方を兼ね備えた、本格的な科学的分析といってよい。しかし、その学術的な影響力や狙いが正当に評価されることはなかった。その要因として、ひとつには、政治色が強い『対抗火』と同時期に出版されたという事情がある。だが、とりわけ大きな要因は、ドイツにおける社会学は［政治と一線を画した］純粋な学問であるという、ドイツの社会学者らが抱える自己イメージであったといえる。彼（女）らの目には、『世界の悲惨』は学術的な根拠があいまいであって、ブルデューは自らの学者としての評価を落としつつあるように映ったのである。

以下では、『世界の悲惨』に込められた意図とは一体何だったのか、そして『世界の悲惨』はどのようなことを成し遂げたのかを改めて考えてみたい。まず本書は、現代社会に対する批判的な診断であり、フランスにおける新自由主義的な改革の結果として生じた新しい形の社会的な苦しみ（social suffering）を示している。フランス語の“misère”には二重の意味があるため、ドイツ語や英語への翻訳は困難である（Bourdieu 1997: 11fを参照）。この言葉は、「経済的、精神的、さらには道徳的な側面での『貧しさ（poverty）』のみならず、『悲惨さ（misery）』、すなわち個人的・集合的な苦しみ、不幸、災難といったことをも示唆している」（Bourdieu 1999: viii）。現代社会では、物質的な貧しさや極度の貧困状態などは、一見消失したようにも思える。だが、『世界の悲惨』で行われたインタビューのトピックは、まさにそうした現代社会に暮らす人々が経験するごくありふれた苦しみを中心としていた。ブルデューは、こうした人々に声を与えようとした。彼（女）らは日々の生活に困難を感じているだけではない。彼（女）らの抱える不安は、公的な言説空間では聞き取られることも受けとめられることもない。公的な言説空間においては、政治的な階級とそれにこびへつらうメディアによる決定と見解だけが支配力をもつのだ（Bourdieu 1972）。『世界の悲惨』は、「様々な職業的履歴をもち、かつ様々な社会的状況に置かれた個々人によって、そのような社会がいかに経験されているのかを示すナラティブ」（Bourdieu 1999: viii）の集合体である。したがって、「本書は、複数の短い物語の連続体として読むことができ」、「このことによって、人々の生活と、その一部をなしている社会的苦しみの輪郭を理解することができる」（Bourdieu 1999: 裏表紙）。だが、このような受容の仕方、つまり、『世界の悲惨』のなかの物語を政治的な告発のみと結びつけて読むような受容の仕方では、本書に込められた理

論的な狙いの方を見逃すことになる。「読者へ」と題したはしがきでブルデューは、［本書に収録された］インタビューの十全な理解には方法論をめぐる議論と理論的な分析とをふまえることが不可欠だと述べてはいるが（Bourdieu 1999: 1を参照）、彼は読者とこれらの点を共有することを強く望んだわけではなかった。むしろもっとも注目すべきなのは、ブルデューがスピノザの格言「嘆くな、嘲るな、呪うな――ただ理解せよ」[(6)]（Bourdieu 1999: 1）に言及している部分である。ここにこそ、単なる臨床的事例研究やタイプ別の分類を避けて、理解的で共感的な見方を確立するためのブルデューの思索が明瞭にあらわれている。英訳版の翻訳者によるはしがきは、『世界の悲惨』の理論的価値と、本書がブルデューのライフワークに占める位置を強調している。

> ブルデューがいみじくも述べているように、『世界の悲惨』とは何よりもまず、社会学的な企てである。それゆえ、極めて重要視すべきは、［それぞれの章の冒頭に付された］短い序論と小論である。これらがあることで、［本書のなかの］インタビュー群は、時空間の軸を与えられ、ある解釈枠組みのなかに配置されていく。本書に登場する社会学的な枠組みと概念的用語は、1950年代後半から現在にかけてのブルデューの著作に慣れ親しんできた者たちにとってはなじみ深いだろう。しかし、他の著作に比べたときにとりわけ『世界の悲惨』で顕著に示されているのは、特異なもの（the idiosyncratic）から典型的ないし象徴的なもの（the emblematic）を構築していくという、ひとつの社会学のあり方なのである（Bourdieu 1999: ix）。

ブルデューは経験科学的な（empirical）研究者であり、多彩な方法で収集した経験的なデータと絶えず向き合うなかで自身の概念や理論を発展させ、修正を加えていった。しかしながら、彼がいつも目指していたのは、社会学的主観主義（sociological subjectivism）と社会学的客観主義（sociological objectivism）の双方がもつ一面性を回避することでもあった。常に、この社会学上の対立関係を乗り越え、これらふたつの視座（perspective）の統合を望んでいたのである。これにくわえて、『世界の悲惨』では、「ふたつの、二重に矛盾を抱えた目標」の調停を試みている。

> 一方で、［以下でなされる］考察は、インタビュイーの置かれた位置を客観的に分析し、彼（女）らの見地（point of view）の理解に必要なすべての要素を提供するものでなければならない。しかもこれを、［彼（女）らを］客観化＝客体化（objectivize）してしまうような距離を打ち立てることなく達成しなければならない。なぜなら、この距離があると、個人は単なるショーケースの標本へと還元されてしまうからである。他方で、個々人の視座に可能な限り寄り添いつつも、［彼（女）らを分析者の］「分身（alter ego）」とみなして同一化したり――そうすれば［彼（女）らは］欲すると欲せざるとにかかわらず客体＝対象（object）の地位にとどまり続けてしまう――、［分析者自身が彼（女）らの］世界観の主体（subject）に転じたりしてしまってはならない（Bourdieu 1999: ix）。

こうした「参与的客観化（participant objectification）の企て」は、ふたつの段階を踏むことで実現されている。第一に、個人［＝インタビュイー］が、自身の声によってライフストーリーを語り、世界と自分自身をとらえる見方を表明する機会を得ることである。ここで研究者が目指すことは、彼（女）らの視座を理解（understanding）することである。第二に、分析者が「語っている人［＝インタビュイー］の経歴（career）、受けてきた教育、職業経験といった社会的条件（social condition）と、それを受けての彼（女）らによる条

件づけ（conditioning）の営み」とをともに考慮することである。ここで目指されるのは、「彼（女）らが、自分が現在のような状況にある原因・理由をどのようなものだと考えているか」（Bourdieu 1999: ix）を説明（explanation）することである。学問のなかの学問（science of science）としての哲学の伝統のなかでは、100年以上の長きにわたって理解と説明とのあいだに断絶が生じてきたが、ブルデューはこれに逆らって両者の表裏一体性を主張したのである。

『世界の悲惨』こそがブルデューの業績のハイライトであり、到達点であるとみなすべき理由がもうひとつある。ブルデューは、社会学だけでなく思考過程一般において、いかなる実体主義（substantialism）も本質主義（essentialism）も拒絶する。社会的空間はもっぱら、位置（position）どうしの関係ないしその保有者どうしの関係によって構造化されている。すなわち、そこにはいかなる中核も、いかなる固定的な中心も、いかなる中心的組織も存在しない。

> 我々には、同時的に存在する――ときに直接的な競合関係にある――複数の見地の多層性に対応した多層的な視座が必要である。こうしたパースペクティヴ主義（perspectivism）は、シニシズムやニヒリズムへと通じかねない主観主義的相対主義（subjectivist relativism）とは何の関係もない。それどころか、それは社会的世界の現実そのものに立脚しつつ、今日の社会における多くの事象、とりわけ利害関心・志向性・ライフスタイルの衝突によって引き起こされる苦痛の多くを説明するのに役立つのである（Bourdieu 1999: 3f）。

それゆえブルデューは、人々が抱える苦しみを、彼（女）らが社会空間において占める葛藤をはらんだ位置や関係と結びつけて理解し、さらに『世界の悲惨』のなかの彼（女）らの語りを、社会的な場／界（field）における葛藤および様々な視座を表象＝代弁（representation）するものとして編成したのである。

2. 教育学研究において『世界の悲惨』が重要であるのはなぜか

教育学研究において『世界の悲惨』が重要だといえるのはなぜか。

ブルデューの業績の様々な要素が教育学研究においても応用可能であることを示す根拠は数多くある。ひとつには、単一の理論的な立場への偏りを回避するようなアプローチ、もうひとつには、理論形成と合理的で経験科学的な方法とを兼ね備えるようなアプローチが挙げられる。ブルデューによる、このふたつのアプローチは、原理的に見れば、一般的にも教育学的にも魅力的なものであり、まさにブルデューの概念の重要性を示す根拠でもある。だが一方で、ブルデューの批判的アプローチは、ときに物議を醸すものでもある。なぜなら、この批判的アプローチは、研究成果や学術的名声に基づく公的な介入のみならず、時代の診断とそれに応じた研究のデザインという学術的な目的の措定をも含むものだからである。今日に差し迫った問題に関連して、ブルデューは、価値自由の名のもとに現実逃避しているようにしか思われないような学問的禁欲主義を批判する（Eva Barlösius 2006: 160）。これが第三の根拠となる。研究／学問と、教育的／政治的行為との違いにどうしても拘らざるをえない自己充足的な研究者らに対するブルデューの批判は広く受け入れられた。

さらに、標準化された経験科学的な研究に対する批判が第四の根拠である。なぜなら、この種の標準化された研究は、往々にして、研究対象を制圧した挙句、研究対象を自ら創り出してしまうし、研究対象が置かれた条件、依存性、それらによって引き起こされる効果といったものを十分に反映させることができないか

らだ。そして最後に、質的研究、特に教育学におけるビオグラフィ研究は、『世界の悲惨』に多くを学ぶことができる。これがブルデューの重要性を示す第五の根拠である。その詳細については、次の段落で論じる。

以上の考察は、教育学におけるビオグラフィ研究の著しい欠陥に端を発している。教育学におけるビオグラフィ研究は、古典的な理論における主要なトピック、すなわち世界に対する人間の関わりである人間形成論と関連している。また、それは、個人によって世界や自己がどのように参照され維持され変容されてきたのかについて、経験科学的に解明しようとするものである（例えば、Martotzki 1999: 58 L. Wigger訳）。さらにいえば、教育学におけるビオグラフィ研究――明らかに、人間形成論に基づくようなビオグラフィ研究を含む――とは、「時代の診断（Zeitdiagonose）」としても理解されうる（同上）。したがって、それは、「アノミー状況における個人の方向づけが、如何にして可能になるのか」という問いに対する答えを必要とするのみならず、ビオグラフィ的な経験や個人の知覚の分析によって、社会構造や社会的変容過程を洞察することをも必要とする。

> 構造的にいえば、概念としてのビオグラフィは、主観性と社会的客観性との接合面、すなわちミクロとマクロ、その両方の水準に位置づいている。それにより、学習や人間形成の過程は、主観的かつ客観的な分析のあいだで引き裂かれるようなものとして理解される（Krüger・Marotzki 1998: 8 L. Wigger訳）。

これまでのところ、ビオグラフィ研究のほとんどが、事例研究や人間形成、すなわち主体化の過程を再構成するような研究であった。そういったビオグラフィ研究は、一つひとつの事例を抽象化することもできず、また、学習や人間形成の物語をより大きな主体志向的、社会理論的文脈へと統合することもできない（Krüger 1999: 25fを参照）。主体的なナラティブや、そのあとに続くビオグラフィ的な解釈に集中しすぎるあまり、個々の思考、知覚、行為が社会構成的なものであるということが、抽象的で一般的な見解としてしか言及されなくなってしまうのである（ただし、Alheit 1999などのいくつかの例外も存在する）。

> ナラティブやテクストが、どれほどビオグラフィ的であるにせよ、ビオグラフィ的な分析の中心は常にエゴ（ego, das Ich）である。［ビオグラフィ研究では］社会的現実や現実なるものへの参照のあり様はたえず普遍的であり、だからこそ、「真実」なのである。［だが、］まさにこの普遍性〔という後ろ盾〕によって、社会的現実には恣意性が付与されることになる。すなわち、〔普遍性によって〕社会的現実は恣意的に「正しい」（＝「真実」である）とされてしまうのである（Engler 2001: 66 L. Wigger訳）。

これに対して、ブルデューは「ビオグラフィ的なイリュージョン（幻覚）」に警告を与えた（Bourdieu 2000; Ger.: 1998a）。彼は、“自我（ego）”（*Ich*）、“アイデンティティ（identity）”、“ライフストーリー（life story）”（*Lebensgeschichte*）といった構成物が、どのような社会的条件によって構成されているのかを問うた。ブルデューは、もしビオグラフィ的なナラティブやビオグラフィ的な分析的研究の社会的前提条件が考慮されないならば、問題含みの結果を招くことになると警告を発した。「ビオグラフィの主体と客体（インタビュアーとインタビュイー）は、ある意味、語られた存在――それは暗黙裡にすべての存在をさし示している――の意味を形成するような前提条件（*the postulate of the meaning*）を共有することに関心を寄せている」（Bourdieu 2000: 300 斜体は原語の通り）。インタビュイーは、「自分を自分の人生のイデオロギー保持者へとつくりあげる」（同上）傾向性をもつ。その傾向性は、「人工的に意味を創造することを自然と受け

入れてしまう傾向性をもったビオグラファー［インタビュアー］によって［支持される。］しかも、ビオグラファー［インタビュアー］自身が専門的な解釈者として自己形成をしようとする際には特に」（同上）［インタビュイーのその傾向性は］支持されることとなる。

しばしば誤解されるのだが、ブルデューの批判は、ビオグラフィ的なナラティブとビオグラフィ的な分析的研究とを暗に否定しようとするものではない。実際には、研究活動とそこで使われる概念の社会的条件に対する省察を要求しているのだ。『世界の悲惨』とは、まさに、ブルデューがそれら両方の社会的条件を省察しようとした取り組みそのものなのである。

ブルデューの理論的な取り組みは、主観性、さらにいえば、主体の思考・知覚・行為に一貫してみられるような社会的決定性を確証づけることへと向けられている。社会的位置づけと個人の視座との交差、すなわち内在化された社会構造どうしの交差を記述するためにブルデューが打ち出した概念、また、個人への拘りを放棄して社会構造へと目を向けること、および実践（プラクシス）の形式を再生産することを記述するためにブルデューが打ち出した概念、それがハビトゥスなのである。ブルデューの取り組みは、一見すると、ビオグラフィ研究における主観性や個人の尊重とは対照的に思われる。だが、『世界の悲惨』のなかのインタビュー、解釈、理論的枠組みには、インタビュイーを尊重する念が示されている。そしてまた、『世界の悲惨』ではインタビュアーとインタビュイーが共通してもつ条件を省察しているのだが、その水準は賞賛に値すべきものである。これが、ブルデューの重要性を示すさらなる根拠なのである。

3. ブルデューの理論と方法をいかに応用しうるか

『世界の悲惨』は独特な著作であるため、もう一度、同じような著作を編むことは難しいだろう（Schultheis; Schulz 2005）。たいてい、我々はブルデューを単著者として論じ、あるいは論じがちであり、ひとつの知識集団としてのブルデューの自己イメージを無視して、他の共著者がいることを忘れている。ブルデューの研究チームには多くの研究者がおり、『世界の悲惨』には20人の共著者の名前が記載されている。また、本に名前が記載されていないスタッフが他にも多くいる。ブルデューの著作と研究活動は大きな企業に例えられるだろう（cf. Fröhlich; Mörth 2009）。こうした企業のような研究集団をつくることは他の誰にもできない。では、彼の業績や研究活動は、これまでに述べてきた方法論や理論的枠組みにいかに適合しているのだろうか。

以下の段落では、ドイツにおけるブルデューに関する議論について述べる。教育的ビオグラフィ研究は、精確に解釈された個々の事例を分析しようとするだけではなく、制度的、社会的、歴史的な文脈や条件について、また共同体と個々人の主観的な経験や活動との関係の分析について結論を導こうとするものである（cf. Baacke/Schulze 1979; Dausien/Hanses 2016）。では、これらの研究目的はどの程度まで実現されるのか。ビオグラフィ分析の方法は、個人と世界の関係および個人とその個人自身との関係、すなわち世界観と自己概念の再構成を可能にする。だが、制度的、社会的、歴史的な文脈を再構成する際には、〔ビオグラフィ分析の方法に〕どれだけの可能性が見出され、〔その方法によって〕どれだけの情報が集められるのかによって、〔ビオグラフィ分析の〕方法は場合によっては限界に達してしまう。つまり、個人にうまく焦点をあてることで経験的データの個別化は促進されてきたのだが、制度的、社会的、歴史的な側面を明らかにすることはずっとできずにいた。

数年来、この問題は人間形成の諸概念を扱うビオグラフィ研究者の議論の的になっている[(7)]（Wigger 2004; Koller & Wulftange 2014）。

コラーは「個人を超えた、社会的、もしくは、とりとめもない諸条件を隠蔽するおそれ」に対抗する戦略をふたつ論じている（2016：176）。ひとつめの戦略は、ビオグラフィ研究のインタビューを意味づけるにあたって「社会理論的なアプローチを取り入れること」である。社会理論的なアプローチとは、ブルデューのハビトゥス論やフーコーもしくはバトラーの言説理論のことである（cf. Wigger 2006; 2007; Rose 2014; Wischmann 2014）。ふたつめの戦略は、ブルデューの社会的な場／界に関する分析や言説分析の手法といった、他のタイプのデータへと経験科学的な地平を拡げていくことである（cf. Koller 2016; 179; Rosenberg 2011; Reh 2003）。

このふたつの戦略は解決策となりうるものであり、考えるに値するものである。最初の方法の難しさは、適切な理論を見つけ、包摂の論理を回避することにある。とはいえ、概念の前提に関する議論、すなわちハビトゥス概念やかなり特別な形で使われる人間形成の概念の前提について議論することは避けられない。これはまた先ほど取り上げられた社会理論にもあてはまるものである。

ナラティブインタビューは、非-歴史的なビオグラフィ研究においては標準的な方法と考えられているが、半構造化インタビューには多くの様式が混在しており、それらはそれぞれの方法で質問を構成し、物語を生成するため、多くの議論を必要とする。質問と研究計画に基づいて、ライフヒストリーに関するナラティブと、そのナラティブに多少なりとも密接に関連している様々な必要性とが補われる。そうして、例えば、社会的なデータに関するアンケートや、物語のなかで語られてはいないような研究テーマにかかわる質問、インタビューの状況やその準備、追跡調査に関する考察や反省を記述することなどによって、収集データはより豊かになる。くわえて、語られた内容はまた、一定の時間の間隔をあけたさらなるビオグラフィ的なインタビュー（長期的な計画）や、教師、保護者、アドバイザー、友人といった被調査者の身近にいる異なる観察者らに対するさらなるインタビューによって補われる（Herzog 2016; Equit 2011）。だが、〔ライフストーリーに関するナラティブ、収集データ、被調査者の身近な人々へのインタビューといった〕これらの方法論的複眼（trainagulations）は、外側からの観点と直接的な環境に関する情報によって補われているにもかかわらず、ビオグラフィ的なナラティブに焦点をあて続けており、一般的な社会的条件や歴史的な出来事は［ビオグラフィ的なナラティブの］データと密接に関連しているところからしか描かれないため、［実際には］思考の地平の外側におかれたままになってしまっている。

サビーネ・リーは、フーコーやバトラーに即して、言説を（時に自叙伝的な）ビオグラフィ的なテクストが現れる文脈とみなしたうえで、そのテクストが文脈の地平線上で検討されうるし、検討されるべきであると主張する。ドイツ民主共和国の崩壊とドイツ統一後の旧東ドイツ（GDR）の教師のキャリアを分析するなかで、GDRとその党員の不正についての公的な言説の分析に基づいて、彼女は教師らの語りの独特な特徴が告白（confession）にあると理解した。しかし、そこには以下のふたつの方法論的な問題があった。(1)言説のなかで分析するのに妥当な部分はどこか、そして、選択された部分の妥当性をどのように根拠づけるのか。(2)言説を正確に意味づけていないのではないか。くわえて、言説と歴史的事実および社会構造のあいだにはどのような関係があるのか。

フロリアン・フォン・ローゼンベルク（2011）は、ビオグラフィ的なインタビューを分析するなかで、ある部分をハビトゥスの変化（change）、ある部分をハビトゥスの変容（transform）とみなして人間形成の過程を再構成した。彼はハビトゥスの再構成を、場／界の再構成とみなした。つまり、人間形成の再構成過程の社会的条件と歴史的背景を明らかにし、そして同時に、人間形成の精巧な理論と同じく、人間形成の過程を歴史的に位置づけた。しかしながら、彼は「場／界の構造の再構成、つまり社会的過程を規定する論理の再構成のための方法」が抜け落ちているという問題を指摘する。そのため、彼は場／界を分析し再構成す

る方法として言説分析と言説理論を使用している。しかし、そのようなアプローチがブルデューの理論からいかに大きくかけ離れているかを見れば、言説分析が場／界の理論を再構成することにとって妥当な方法ではないということができるだろう。

近年、ドルトムント工科大学の研究者らは、また異なる視座に基づいて研究を進めている。その視座というのは、個人と世界また個人とその人自身の関係性を認識するのに、本質的に重要なことに関連している制度と制度の実践とに焦点をあてて文脈化するというものである（Wigger 2009, 2010; Wigger & Equit 2010を参照）。クラウディア・エクイット（2011, 2010, 2012を参照）は、少女や若い女性から聞いた特定の状況における暴力に関する語り、もしくは暴力の経験をビオグラフィの文脈のなかで分析した。彼女らの暴力行為は「暴力の履歴（violent career）」として概念化された。それは犠牲になること、それ［犠牲になること］が無視される経験、そして暴力の拡大が、特定の制度的かつビオグラフィ的な条件の下で生起することを意味している。承認の制度的な欠如という問題がこれらのビオグラフィ的な危機の中心にあるため、彼女らは自らの承認と「名誉ある勝者」としての立場を獲得するために闘いはじめる。しかも、制度によって制裁を受けたり、個人の人生史においてさらなる損失を被ったりするにもかかわらず、仲間うちで暴力を行使しながら闘うのである。エクイットは学校と家族の問題と同様に、若者間における暴力を手段とするコンフリクトを「承認をめぐる闘争」（struggle for recognition）として呈示する。承認を相互作用（私とあなたのあいだの関係）と共同体への個人の統合（私と私たちの関係）として二重に見ようとするヘーゲルの見方が、エクイットの理論的基礎となっている。相互作用における承認は、常に社会制度、社会構造、共有された価値の地平線上で生じる。さらに、暴力の履歴からの脱出口を再構成することによって、エクイットは次のようなことを示す。すなわち、教育的な支援と制度的な余地が彼女らに対してオルタナティブな承認のための新しい選択と可能性を拡げるとき、少女や若い女性がいかに状況のアセスメントの仕方を変え、行為の新しいパターンを形成するかということを示すのである。暴力の履歴からの脱出口と暴力の履歴のビオグラフィ的な過程とは、そのどちらともが、家族、学校、児童福祉のような制度の貢献的な条件、および障害となる条件を示している。人間形成の過程に見られるような人間形成の潜在的な可能性は、それらによって規定されているのである。

このような視点に依拠して、以下の段落では、学校とその矛盾した構造にかかわる若者が抱える問題とビオグラフィ的な危機が相互に依存していることを示していく（Wigger 2009, 2010）。2012年の会議でコラーとヴォルフタンゲが議論のために準備したインタビュー（Koller & Wulftang 2014に参照）をもとにして、ヴィガーは移民の背景をもつひとりの若い男性の自己と世界との関係性を再構成した。そのうえで、彼の態度を、承認を求める主張と承認をめぐる闘争、彼の失敗の経験と支援を受けた経験、そして彼の名誉感と成功したいという意志とともに、学校に関する様々な議論の文脈において捉えた。

第一に、学校における中心的な課題は、様々な教科を教えることを通して知識とスキルを伝達することである。教師らは教科の成績と個人の発達という点において（この実践が学生をクラスの他の学生と比べるということで、しばしば批判的に見られるべきであるにもかかわらず）、児童と学生のレベルを評価する。知っていることや、できることに関する児童と学生の自信は、世界の様々な側面や教わった内容、そして教育的な要求に対峙するなかで形成される。彼（女）らは学習することにおいて同級生と教師そして両親からの承認を見出す。〔学習をめぐる〕この知識とスキルに関する承認には基準がある。ひとつは、主題となる事柄に関する基準であり、もうひとつは、個人の発達と教育の水準に関する考慮という基準である。この例で注目すべきなのは、上記のインタビューが、授業の内容や目に見える形で示される関心と能力に関する情報を提供しなかったことである。インタビュイーにとって、一見、学習と達成は他の学生との比較において、あ

るいは競争で勝つための単なる手段としてのみ言及する価値があるように思われる。学習と達成とは別の次元における承認、すなわち比較と評定によるヒエラルキーの次元における承認が、このインタビューと自己呈示の中心にある。

第二に、学校は学生に対する相対的な評価の結果に証明書を授与する。生徒のパフォーマンスに関するこのような比較は、ある細分化したヒエラルキー〔の形成〕へとつながると同時に、未来へと通ずる教育の経路と機会の選別的な厳しい細分化にもつながる。したがって、普通は、証明書が人々の関心の的となる。学校における評定とランクづけが、証明書という社会的承認の究極の形式の基準となる。〔その基準が〕いい学生なのか悪い学生なのか、あるいはより一般的に言えば、「勝者」なのか「敗者」なのかという自己意識の構築の基礎にもなる（Nüberlin 2002に参照）。学業上の成功あるいは失敗の承認はその人のすべて、すなわち仲間集団における現在の彼（女）らの位置づけのみならず、彼（女）らが未来に達成しうる社会的地位の可能性と限界とに影響を与える。承認をめぐる闘争はほとんどの学生にとって終わりがない。なぜなら、成功に向けて努力し積極的に関与することはすべての人に期待されるが、誰もが競争で勝てるわけではないからである。学校と社会における成功への要求を満たそうとする自己イメージと、相対的な失敗の公的なアセスメントとのあいだにコンフリクトがある。そのコンフリクトは、例えば、正当化や言い訳によって、学校での失敗にもかかわらず、成功へのアスピレーションを保つという承認の追求へとつながりうる。肯定的な自己イメージを保つためのもうひとつの方法は、学業の失敗を人生の他の領域、あるいは他の基準と取り換えることによって補うというものである。このインタビューはこのコンフリクトの一例であり、失敗の経験に対する様々な対処戦略（coping strategies）をわかりやすく示している。〔そういった対処戦略は〕ビオグラフィ的なナラティブの中心におかれている。つまり、〔それらの対処戦略は〕学歴上の成功を妨げる初期の悪条件によって正当化された言い訳、公正ではない教師に対する非難、見せかけの自信、そして自らの道徳性の強調など、学業上の達成ではない他の領域において承認される資格を得ようとするものである。

第三に、学校が学生に対して期待するのは、従順なふるまい、きちんとした出席、アクティブな参加、学習課題の応用、社会的に品行方正なふるまいなどの務めを果たすことである。誤った行動は様々な規則に即して制裁を受ける。正しいふるまいと努力の程度は道徳における承認の基準である。学校の規則とルールに従うことと、学業的な要求を受け入れることは、もっとも重要である。これらは、ふるまいが従順的かあるいは逸脱的かを判断する基準、道徳的な自己意識を形成し、道徳的に正しい人間としての自己イメージを確立する基準となる。インタビューのなかで、回答者は、自分を育ちがよく順応している人間として、過ちを犯したこともなく非難されるところもない人間として呈示した。人間として承認されること、成功すること、そして高校あるいは大学の卒業証書という形式でもって社会的に承認されることへの権利の主張は、〔インタビューのなかで回答者が呈示するような〕道徳的な確信が根拠となっている。したがって、名誉感と成功と承認への主張は絡み合っている。それゆえに、人間形成の再構成された形式は、学校および様々な側面における学校の諸機能と密接に関連している。このようなわけで、教育の過程が常に自由なものであり、他者と世界とかかわる主体の生産的なパフォーマンスであると仮定することなど、どのような決定論にもできないのである。

この論文全体を通して次のことが明らかになった。すなわち、ビオグラフィ的な危機と学業の問題とのあいだの明白な関連性を証明するのは難しいということである。拙論のなかのインタビューの質問の部分では、家族と家庭環境には注意が払われず、家庭と学校と地域に関する追加情報も提供されなかった。したがって、この試みは文脈化の重要性を説明する初歩的な段階とみなされるものでしかない。『世界の悲惨』をモデルとするならば、本論で焦点化して論じたようないくつかの問いや、より細分化された場／界の分析

も抜け落ちてしまっている。さらに、拙論で挙げられた例においては、インタビューの相互行為の条件や、インタビュアーとインタビュイーの暗黙の合意や、インタビューの設定によって回答が規定されてしまうことに対する反省をとりこぼしてしまっている。また、拙論で取り上げた例は一名を対象とした一回限りのインタビューで構成されており、あとから考えれば、その場／界における、別の位置にいる人との関係性について特定の経験科学のデータに基づいて再構成する機会がなかった。このように、ブルデューの見地からすると、ビオグラフィ的なインタビューには、個別事例に焦点づけることによってしかナラティブが解釈されないという限界があること、だからこそ社会学的な教育研究の視座が必要であることが明白になった。

4. 結論

様々な点を検討した結果、ブルデューの業績、とりわけ『世界の悲惨』が経験科学的研究とビオグラフィ研究にとっていかに重要であるかが示された。特に、インタビュイーを客観化＝客体化しすぎることによって、彼（女）らが「ショーケース」のなかにいるかのように知覚してしまわないようにすること、だがその一方で、インタビュイーの見地に寄り添うあまりに、ビオグラファー自身の見地が抑圧されてしまわないようにすること、そういったブルデューの警告は、研究者にとって未だ魅力的な示唆としてみなされるべきである。

また、教育学研究とビオグラフィ研究の領域が、人間形成論と共に考察されるべきであることも明らかになった。そうすれば、それぞれの理論に齟齬や欠陥があったとしても、多くの場合は残りふたつの理論によって補填されうるからだ。

最後に明らかになったのは、正しい視座を得たビオグラフィ研究は、例えば、教育歴を調査したり、いわゆる「暴力の履歴」の原因を調査したりする際に、教育に役立つような成果をも提供しうるということであった。

脚注

i　本論文は、大阪大学において2016年11月９日に行われた講義の原稿を加筆したものである。本論をもとに刺激的な議論を交わすことができたことを、岡部美香先生をはじめとする受講者の方々への感謝の意としてここに表したい。

訳者注

(1) 本翻訳における訳者の担当箇所は次の通りである。
〔上林梓（はじめに・第２・４節）、小川竜冴（第３節前半）、近藤凜太朗（第１節）、林宮玉（第３節後半）〕

(2) ドイツ教育思想・教育学の重要概念であるBildungは、これまでも「人間形成」「陶冶」「形成」「教養」「自己形成」「教育」と訳されてきたが、L・ヴィガー、山名淳、藤井佳世編著（2014）『人間形成と承認―教育哲学の新たな展開―』における山名の議論を参照し、本稿では「人間形成」として訳出した。

(3) ビオグラフィ研究とは、「研究の素材として「パーソナルドキュメント（手紙、作文、文章、日記、自伝）」を活用し、その方法として従来の実験・調査には収まらない「インタビュー、聞き取り、参与観察、グループ討論」などを試み、さらには「フィルム、音声記録、新聞記事、議事録、調書」など、多様なフィールドにおいて展開（する）」経験科学である（西平,（2014）『人間形成と承認―教育哲学の新たな展開―』L・ヴィガー、山名淳、藤井佳世編著、72頁）。

(4) 1990年代までのドイツの戦後教育改革の歴史については、以下の文献の第１章を参照されたい。天野正治ほか編（1998）『ドイツの教育』東信堂.

(5) ここで言及されている「ミリュー（社会的ミリュー）」とは、社会的不平等と人々のライフスタイルの連関を分析するために提唱された比較的新しい概念であり、従来の「階級」概念が生産関係による一義的な規定を前提していたことを批判する立場から、1980年代以降ドイツ社会学で盛んに取り上げられるようになった。

高橋秀寿は、この概念を「『客観的』な社会―生活条件（＝職業と職場、教育水準、収入や居住、地域などの生活状況、世代、年齢、宗派など）と『主観的』な内的態度（＝価値観や意味―コミュニケーション関係、生活スタイルや労働・余暇・家族観、交友―婚姻関係、美的趣味、消費―モード志向、政治やその制度への立場など）、およびその相互影響によって構成された文化的な集団」（高橋秀寿『再帰化する近代――ドイツ現代史試論』国際書院、1997、43頁）と定義している。ドイツにおける理論展開を概観し、日本の政治状況の考察に応用した文献として以下を参照されたい。松谷満ほか（2007）「東京の社会的ミリューと政治――2005年東京調査の予備的分析」『徳島大学社会科学研究』20，75-154頁.

(6) スピノザ『国家論（*Tractatus Politicus*）』（1677）の一節。畠中尚志訳（『国家論』岩波書店、1976）、および井上庄七訳（「政治論」『世界の大思想９――スピノザ・倫理学（エティカ）他』河出書房新社、1966）を参考にしたうえで、独自の訳をあてた。

(7) 野平によると、人間形成論的に方向づけられたビオグラフィ研究は2000年代以降ドイツ教育学におけるひとつの主要な主題となっており、哲学的な人間形成論（Bildungstheorie）と経験的人間形成研究（Bildungsforschung）の媒介のひとつの形態として捉えられている（野平慎二（2016）「人間形成論的に方向づけられたビオグラフィ研究における人間形成論と人間形成研究の媒介―思想史的および物語論的観点からの検討―」愛知教育大学紀要65号，99-107頁）。この他にL・ヴィガー、山名淳、藤井佳世編著（2014）『人間形成と承認―教育哲学の新たな展開―』も参照。

(8) 以下を参照。
Honneth, Axel（1992）. Kampf um Anerkennun. Suhrkamp Verlag.
Honneth, Axel（1996）. The Struggle for Recognition: The Moral Grammar of Social Conflicts. translated by J. Anderson. The MIT Press.
Honneth, Axel（2014）『増補版 承認をめぐる闘争―社会的コンフリクトの道徳的文法』（山本啓/直江清隆訳）法政大学出版局.
L・ヴィガー、山名淳、藤井佳世編著（2014）『人間形成と承認―教育哲学の新たな展開―』第７章.

References

Alheit, Peter et al.（1999）Gebrochene Modernisierung - der langsame Wandel proletarischer Milieus. Eine empirische Vergleichsstudie ost- und westdeutscher Arbeitermilieus in den 1950er Jahren. Bremen: Donat.

Baacke, Dieter & Schulze, Theodor.（Hrsg.）（1979）Aus Geschichten lernen. Zur Einübung pädagogischen Verstehens. München: Juventa Verlag.

Barlösius, Eva.（2006）Pierre Bourdieu. Frankfurt/ New York: Campus Verlag.

Bourdieu, Pierre.（1972）Les doxosophes, in: Minuit 1, Nov. 1972, pp. 26-45.

Bourdieu, Pierre.（1979）La distinction. Critique sociale de jugement. Paris: Les Éd. de Minuit.

Bourdieu, Pierre.（1982）Die feinen Unterschiede. Kritik der gesellschaftlichen Urteilskraft. Frankfurt am Main: Suhrkamp.

Bourdieu, Pierre.（1984）Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste. Cambridge, Mass.: Harvard University Press

Bourdieu, Pierre.（1989）『ディスタンクシオン――社会的判断力批判』（石井洋二郎訳）新評論.

Bourdieu, P. et al.（1993）La misère du monde. Paris: Éditions du Seuil

Bourdieu P. et al.（1997）Das Elend der Welt. Zeugnisse und Diagnosen alltäglichen Leidens an der Gesellschaft. Konstanz: UVK Universitätsverlag Konstanz（Edition discours, Band 9）

Bourdieu, P. et al.（1999）The weight of the world. Social suffering in contemporary society. Stanford, Calif.: Stanford University Press.

Bourdieu, Pierre.（1998）Contre-Feux 1: Propos pour servir à la résistance contre l'invasion néo-libérale. Paris: Raisons d'agi

Bourdieu, Pierre.（1998）Gegenfeuer 1. Wortmeldungen im Dienste des Widerstandes gegen die neoliberale Invasion. Konstanz: UVK Universitätsverlag Konstanz

Bourdieu, Pierre.（1998）Acts of resistance: against tyranny of the market. New Press

Bourdieu, Pierre.（2000）『市場独裁主義批判』（加藤晴久訳）藤原書店.

Bourdieu, Pierre.（2000）The Biographical Illusion. In: Identity. A Reader（Ed.: Paul du Gay, Jessica Evans and

Peter Redman). London, Thousand Oaks; New Delhi: Sage Publications. pp 297-303.
Bourdieu, P. (2001) Contre-feux 2: Pour un mouvement social européen. Paris: Raisons d'agir
Bourdieu, P. (2001) Gegenfeuer 2: Für eine europäische soziale Bewegung. Konstanz: UVK Universitätsverlag Konstanz
Bourdieu, P. (2003) Firing back: against the tyranny of the market 2. New Press.
Bourdieu, Pierre & Passeron, Jean-Claude (1971). Die Illusion der Chancengleichheit. Texte und Dokumente zur Bildungsforschung. Stuttgart: Klett.
Dausien, Bettina & Hanses, Andreas. (Hrsg.) (2016) Konzeptualisierungen des Biografischen - zur Aktualität biografiewissenschaftlicher Perspektiven in der Pädagogik. In: Zeitschrift für Pädagogik, Jahrgang 62, Heft 2, S. 159-171.
Engler, Steffani. (2001) "In Einsamkeit und Freiheit?" Zur Konstruktion der wissenschaftlichen Persönlichkeit auf dem Weg zur Professur. Konstanz: UVK Universitätsverlag Konstanz.
Equit, Claudia. (2010) Gewalthandeln und Ehre. Versuch einer anerkennungstheoretischen Deutung. In: Wigger, Lothar/ Equit, Claudia (Hrsg.). Bildung, Biografie und Anerkennung. Interpretationen eines Interviews mit einem gewaltbereiten Mädchen. Opladen: Barbara Budrich. S. 55-82.
Equit, Claudia. (2011) Gewaltkarrieren von Mädchen. Der "Kampf um Anerkennung" in biografischen Lebensverläufen. Wiebaden: VS
Equit, Claudia. (2012) Zum Verhältnis von Bildungs- und Anerkennensprozessen am Beispiel des Falls "Simone". In: I. Miethe/ H.-R. Müller (Hrsg.). Qualitative Bildungsforschung und Bildungstheorie. Opladen, Berlin, Toronto: Barbara Budrich. S. 209-226.
Fröhlich, Gerhard & Mörth, Ingo. (2009) "Eine Art Großunternehmen" – Bourdieus Werk und Produktionsweise im Spiegel von "HyperBourdieu". In: Fröhlich, Gerhard; Rehbein, Boike (Hrsg.). Bourdieu Handbuch. Leben – Werk – Wirkung. Stuttgart; Weimar: Verlag J.B. Metzler. S. 373-375.
Herzog, Sonja. (2016) Männliche Schulverweigerer. Eine bildungstheoretische Längsschnittstudie. Hamburg: Verlag Dr. Kovac.
Koller, Hans-Christoph. (2016) Bildung und Biografie. Probleme und Perspektiven bildungstheoretisch orientierter Biografieforschung. In: Zeitschrift für Pädagogik, Jahrgang 62, Heft 2, S. 172-184.
Koller, Hans-Christoph & Wulftange, Gereon. (2014) Einleitung. In: Koller, H.-C./ Wulftange, G. (Hrsg.). Lebensgeschichte als Bildungsprozess? Perspektiven bildungstheoretischer Biographieforschung. Bielefeld: Transcript. S. 7-18
Krüger, Heinz-Hermann. (1999) Entwicklungslinien, Forschungsfelder und Perspektiven der erziehungswissenschaftlichen Biographieforschung. In: Krüger, Heinz-Hermann; Marotzki, Winfried (Hrsg.) (1999): Handbuch erziehungswissenschaftliche Biographieforschung. Opladen: Leske + Budrich. S. 13-32
Krüger, Heinz-Hermann & Marotzki, Winfried. (1999) Biographieforschung und Erziehungswissenschaft – Einleitende Anmerkungen. In: Krüger, Heinz-Hermann; Marotzki, Winfried (Hrsg.) (1999): Handbuch erziehungswissenschaftliche Biographieforschung. Opladen: Leske + Budrich. S. 7-9.
Marotzki, Winfried. (1999) Bildungstheorie und Allgemeine Biographieforschung. In: Krüger, Heinz-Hermann; Marotzki, Winfried. (Hrsg.) (1999) Handbuch erziehungswissenschaftliche Biographieforschung. Opladen: Leske + Budrich. S. 57-68
Nüberlin, Gerda. (2002) Selbstkonzepte Jugendlicher und schulische Notenkonkurrenz. Zur Entstehung von Selbstbildern Jugendlicher als kreative Anpassungsreaktionen auf schulische Anomien. Herbolzheim: Centaurus.
Reh, Sabine. (2003) Berufsbiografische Texte ostdeutscher Lehrer und Lehrerinnen als "Bekenntnisse". Interpretationen und methodologische Überlegungen zur erziehungswissenschaftlichen Biografieforschung. Bad Heilbrunn: Klinkhardt.
Rose, Nadine. (2014) "Es ist wieder dasselbe Katz-und-Maus-Spiel" – Die Frage nach Bildungswegen und die Suche nach Bildungsprozessen. In: Koller, H.-C./ Wulftange, G. (Hrsg.) (2014). Lebensgeschichte als Bildungsprozess? Perspektiven bildungstheoretischer Biographieforschung. Bielefeld: Transcript. S. 239-260.
Rosenberg, Florian von. (2011) Bildung und Habitustransformation. Empirische Rekonstruktionen und bildungstheoretische Reflexionen. Bielefeld: transcript.

Schultheis, Franz; Schulz, Kristina.（Hrsg）（2005）Gesellschaft mit begrenzter Haftung. Zumutungen und Leiden im deutschen Alltag. Konstanz: UVK

Wigger, Lothar.（2006）Habitus und Bildung. Einige Überlegungen zum Zusammenhang von Habitustransformationen und Bildungsprozessen. In: B. Friebertshäuser/ M. Rieger-Ladich/ L. Wigger（Hrsg.）. Reflexive Erziehungswissenschaft. Forschungsperspektiven im Anschluss an Pierre Bourdieu. Wiesbaden: VS. S. 101-118.

Wigger, Lothar.（2007）Bildung und Habitus? Zur bildungstheoretischen und habitustheoretischen Deutung von biografischen Interviews. In: H.-R. Müller/ W. Stravoravdis（Hrsg.）. Bildung im Horizont der Wissensgesellschaft. Wiesbaden: VS. S. 171-192.

Wigger, Lothar.（2009）Über den schulischen Unterricht. Kritische Überlegungen zu seiner Reflexion, seinen Zielsetzungen und einigen seiner Effekte. In: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik. Jahrgang 85. S. 456-475.

Wigger, Lothar.（2010）Institutionelle Zwecke, Anerkennungskonflikte und Bildung. In: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik. Jahrgang 86, S. 542-557.

Wigger, Lothar.（2014）Über Ehre und Erfolg im “Katz-und-Maus-Spiel”. Versuch einer holistischen Interpretation der Bildungsgestalt eines jungen Erwachsenen. In: Koller, H.-C./ Wulftange, G.（Hrsg.）（2014）: Lebensgeschichte als Bildungsprozess? Perspektiven bildungstheoretischer Biographieforschung, S. 47-78. Bielefeld: Transcript

Wigger, Lothar/ Equit, Claudia.（Hrsg.）（2010）Bildung, Biografie und Anerkennung. Interpretationen eines Interviews mit einem gewaltbereiten Mädchen. Opladen: Barbara Budrich.

Wischmann, Anke.（2014）“... desto eingedeutschter wurde ich.” Eine rassismuskritische Perspektive auf（Hakan Salmans）Bildung. In: Koller, H.-C./ Wulftange, G.（Hrsg.）（2014）: Lebensgeschichte als Bildungsprozess? Perspektiven bildungstheoretischer Biographieforschung, S. 47-78. Bielefeld: Transcript